哲學研究　第二百四十號　第二十一卷第三册

世界觀の社會學

樺　俊雄

一

實存哲學の立場を採る哲學者の語る所に依れば、現在ほど人間の存在が問題視されるやうになつたことはないと云ふ。われわれも亦この命題の眞理を確認するものである。そしてこの命題が主張される根據は、現在に於けるほど人々の抱く世界觀や人生觀や歷史觀が相互に激しき對立の狀態にあつてその間に一致點を見出すことが困難なことは曾つてなかつたといふ事實がそれらの世界觀、人生觀、歷史觀を構成する基礎たる人間の存在を改めて根柢的に究明することを要請するといふ點にある。然しながらかゝる問題の提出の仕方に依つてこの命題に依つて解決せんと望まれてゐた課題が果して究極的に解決されたかどうかといふことは、その命題の眞理であることとは別問題である。若しわれわれにして虛心に實存哲學乃至人間學的哲學の諸傾向に注目して、それらの夫々異る

主張の差異を顧みるならば、それらの諸傾向が當初標榜してゐた問題の解決に到達してをらぬことに氣付くはずである。

それ故われわれは右の命題に依つて考へられてゐる主張の眞理以上の眞理に到達することを心掛けねばならぬ。全體が眞理であるとすれば、右の眞理を部分として內に含む如きものこそ一層眞理である。もとよりわれわれが茲に究極の全體としての眞理を語り得ると確信するほどの僭越を敢てするのではない。只すくなくともその究極の全體へ一層近付く一つの道をわれわれは拓り開かうとするだけである。卽ちわれわれの歩まんとする道は諸々の世界觀の對立抗爭の狀態をば人間の存在の在り方へ還元することに依つて克服せんとするのではなくして、かゝる狀態をば社會學的に究明することに依つて克服せんとする道である。勿論こゝに社會學的といはれてゐることもその社會學の立場の異るに從つて夫々異れる意義を有するであらう。然し今こゝでわれわれの社會學の立場に就いてまで立入ることは餘り必要のないことであるが故に、われわれのこれから以後に辿るところの論述の仕方に依つて理解されることを期待することとしたい。たゞ豫めわれわれの社會學の立場に就いて一言するならば、いはゆる知識社會學の立場乃至は一層正しくは歷史社會學の立場であることに言及するに止めようと思ふ。＊

＊拙稿『知識社會學の問題』哲學研究第二百十一號を參照せられたい。

右に述べた如き世界觀に關する社會學的研究のわれわれの立場はまた世界觀の社會學なる特殊の名稱を以て名付け得るものに屬する。かゝる世界觀の社會學なるものが諸科學のうちで如何なる位置を占めるか、またそれらの研究は如何なる意義を有するかといふやうなことに就いては、われわれのこれからの論述を了へて後はじめて充分な解明が與へられるのであつて、今はそれの與へらるべき時ではない。然しこれから後の論述が一層了解し易くなるために豫め世界觀の社會學なる一部分科學の有する學的規定を一應概括的に與へておくことは必要なことでもあらう。元來世界觀の社會學といふ名稱は一二の例を除いては未だ一般に使用されてはをらず、從つて未だ學界に於ける市民權は有してをらぬと云つて差支へない。然し世界觀の社會學なる名稱そのものは決して樓說を俟つてはじめて理解し得る如きものではなくして、辭義通りに理解し得るものである。最近文化社會學乃至知識社會學の立場に於いて屢々藝術社會學とか宗教社會學とか教育社會學とかの名稱が使用されてゐると同樣の意味で世界觀の社會學は世界觀社會學なのである。然しまた他方に於いて世界觀の社會學と平行的に用ひられる類似語として、世界觀の心理學とか世界觀の人種學とかの名稱をわれわれは知つてゐる。就中世界觀の心理學なる語はヤスペルスの名著《Psychologie der Weltanschauungen》に依つて哲學界に於いて市民權を有してゐる。事實このヤスペルスの世界觀の心理學はわれわれの主張する世界觀の社會學と或る共通の地盤の上に立つてゐるのであつて、ヤスペル

スの主張と對質することはわれわれのまた一つの課題でもあるのである。

ところで世界觀に關するかゝる心理學的研究、人種學的研究、社會學的研究は世界觀に關する哲學的研究とともに世界觀學（Weltanschauungslehre）と普通稱ばれてゐる。かくてわれわれの世界觀の社會學は一方知識社會學の研究領域に屬するとともに他方ではまた世界觀學の研究領域にも屬するものである。それ故われわれの研究は一方では知識社會學の立場を解明すると同時に他方では世界觀學の立場に於いて如何なる位置にあるものなるかを闡明する必要に差し迫まられてゐるのである。かゝる二重の課題のうちでわれわれは差當つて後者の課題を解決することを以て第一の義務とせねばならぬ。卽ちわれわれの當面の課題はいはゆる世界觀學のうちに於いて世界觀の社會學は如何なる位置を占めるか、或ひは結論を豫め引き出して言ふならば世界觀學と稱ばれるものの諸々の試みのうちで世界觀の社會學が優越なる位置を占めるのは何故であるかを說明することにあるのである。

かゝる當面の課題を解決することに依つて知識社會學的立場の下にわれわれが如何なるものを考へるのであるかといふことも自ら判明するのである。ところでわれわれは先づ世界觀學なるものが如何なる構成と意義とを有するかを說明することから始めることに依つて自らまた世界觀の社會學の意義が明かになる方法を選ばうと思ふ。世界觀學とは廣い意味に於いては世界觀に關する科學的

研究を意味してゐる。それ故哲學が一般には全體の學として世界觀を探究しそれを設定する科學である限り、哲學は明かに一つの世界觀學であると言へる。事實哲學をば世界觀學の名稱を以て稱ぶ例は尠くないのである。例へばヴィンデルバントの如きは哲學が充さねばならぬ要求は二つありとして、一は凡ゆる認識の確實に基礎付けられし完結的な構造とかゝる洞察の上に打ち建てられる人生觀とを見出すことを主張したに對して、リッケルトがかゝる哲學の理論的並びに實踐的意義といふ二元論的見解を駁して世界觀學としての科學的哲學なる標語を掲げてゐる如きはその顯著なる例である。* かくの如く哲學が理論的な形で世界觀を探究するものであるといふ意味で世界觀學を哲學と同一視する例は乏しくなく、この國の二三の學者に於いても亦見られる所である。

* H. Rickert, System der Philosophie. I. 1921. S. 28.

然しながら世界觀學なる語が最も多く使用される場合に於ける意味は右の場合に於ける意味とは可成り異つてをり、またそれの有する意義に於いては甚しく異つてゐると言へるやうに思ふ。卽ち一般に世界觀學と稱ばれる場合には、それは單に世界觀を探究し、設定する學問といふ意味で用ひられるのではなくして、むしろかゝる世界觀を探究し、設定する學問たる哲學の體系をば何等か客觀的に取扱ひ、哲學の體系を客體として研究する如きものとして用ひられることが普通である。いはゞ世界觀學とは世界觀設定の學ではなく、却つて世界觀設定といふ如き事柄から離れて諸種の世

界觀を客觀的に考察研究する學を意味してゐると解してよい。かくして世界觀學と云へば世界觀の心理學、人種學、社會學乃至は歴史的研究の如き、世界觀設定の哲學ならざるものを意味することと考へられて來る。

このやうな使用法に於ける世界觀學なる語はヤスペルスやマックス・シェーレル等の使用に依つて一般化されたと言ふことが出來る。然しながらこれらの人々に依つてと劣らずディルタイの哲學體系に於ける使用に依つても世界觀學なる語は一般化されたと考へることが出來る。然るにディルタイに依れば世界觀學はまた「哲學の哲學」とも稱ばれてゐて、少くとも世界觀設定の學たる哲學の領域に屬することと考へられてゐる。かく世界觀學なるものが直接哲學の領域に屬すると見做されてゐる所にわれわれはディルタイの立場の或る重大な制限を認めざるを得ぬのであり、またそのことに關聯しては後に詳細に論議する豫定であるが、併しこゝで當面のわれわれの問題に關して重要なることはこのディルタイの使用法に於ける世界觀學なる語も決して單に世界觀設定を目的とする學である哲學と同一視されてはをらぬといふことである。ディルタイに依れば、世界觀學とは歴史上に出現した各哲學體系が夫々普遍妥當性の要求を掲げてゐることの事實を承認した上でそれらの諸哲學體系の歴史的發展を正當に把握し得る如き哲學なのである。卽ちディルタイにあつては各哲學體系の普遍妥當性といふ事實とそれらの歴史的變化といふ事實との間に成立するアンチノミーを解

決することが世界觀學の課題なのである。「人間の生存形式の可變性に對して思惟樣式、宗敎體系、倫理的理想及び形而上學的體系の多樣性が照應する。このことは一の歷史的事實である。哲學的諸體系は諸の倫理や宗敎や法制と同樣に交替する。それ故哲學的諸體系は歷史的に制約されし所產であることが分る。歷史的狀態に依つて制約されてゐるものはまたその價値に於いても相對的である。然し形而上學の對象は實在の聯關の客觀的認識である。かゝる客觀的認識のみが人間の行爲に對して客觀的目的を可能ならしめるこの實在に於ける確固たる立場であるやうに人間には見える。」とディルタイはこのアンチノミーを說明してゐる。* このアンチノミーは歷史的比較的方法を適用することに依つて偶然的な要素を排除しつゝ哲學的諸體系の若干の類型を求め、之が究極に於いては人間の生の夫々の一面的契機を基礎として成立することが理解されるといふのが、ディルタイの確信する所である。このアンチノミーの解決の方法の正否、從つてまたディルタイの世界觀學の構成の正否に就いては後に述べることとして、今特に注目せねばならぬことは、ディルタイの世界觀學の概念に於いても諸種の世界觀の客觀的成立を一應是認した上でそれらの多數の世界觀の存立に依つて惹き起される矛盾を解決することがその中心的な課題であるとされてゐることである。卽ちディルタイに於いても世界觀學は單に哲學の別名とされてゐるのではなくして、却つてまさに哲學の哲學と稱ばれてゐるのである。

以上に依つて分る如く、世界觀學なる語はその一般的使用法に依れば世界觀を設定することを直接目的とする學としての哲學を意味するのではなくして、却つて諸世界觀の存立を前提としてそれらの諸世界觀を對象として研究する一部分科學を意味するのである。然かも世界觀學なる語はかくの如き仕方に用ひられてはじめて意味を有するとわれわれは確信するものである。それ故世界觀に關する科學的研究は一方に於いては或る一定の世界觀を設定してその內容を解明する哲學と他方に於いては夫々自己の普遍妥當性の要求を揭げて存立せる諸種の世界觀をその存在の形式とそれのもつ意義とに關して解明する世界觀學との二つの分野に分れると考へることが出來る。世界觀學としての世界觀の心理學を說くヤスペルスの如きもまたかゝる意見の持主であるやうである。彼に於いても哲學とは世界に對して何等か或る一定の態度を採つて世界觀を與へるものと考へられてゐる。これに對して世界觀を普遍的に「單に考察する」研究は世界觀學であると考へられてゐる。彼は言ふ。「哲學は昔から單に普遍的な考察以上のものであり、衝動を與へ、價値記載表を與へ、人間生活に意味及び目標を與へ、人間生活がそのうちに隱されてゐることを感知する世界をそれに與へ、それに一言で言へば世界觀を與へた。普遍的な考察では未だ世界觀にはならぬ、世界觀であるためには人間にその全體性に於いて關係し且つその全體性から出發する衝動が加はらねばならぬ。哲學者達

* Dilthey, Das geschichtliche Bewusstsein und die Weltanschauungen. G. S. Bd. 8. S. 6.

は單に冷靜な、責任を負はぬ考察者ではなくして、むしろ世界を動かし形成する者であつた。かゝる哲學をばわれわれは豫言者的哲學（prophetische Philosophie）と名付ける。」かゝる豫言者的哲學に對するものは單に考察することを事とする世界觀學である。「普遍的考察は勿論衝動に就いて、人間は如何にして自己の意義を見出し、何を正當と考へるか、如何なる要求を無條件的に拘束的なものとして經驗するかに就いて語る。然し普遍的考察は態度を決定しないし、豫言者的哲學の如く何か或ることを宣傳しようとはせずして、生活の意義を知らんと欲する者に對してはパンの代りに石を與へ、味方になり、從屬し、學徒たらんと欲する者に自己自身に歸らんことを命ずる。彼は自身にとつてたかだか手段であるところのものを學ぶことしか出來ぬ。重要なことは彼は獨創的な經驗そのもののうちに見出さねばならぬ。かゝる考察を私は豫言者的哲學に對して心理學と名付ける。」*かゝるヤスペルスの言に依つて知られるやうに、世界觀の心理學は世界觀を普遍的に考察するものであつて、何等世界觀の設定といふ如きことには關與しない。若し何等か世界觀の設定に關して與るところあるとすれば、それは單にそのための手段にすぎぬのである。そしてかゝる世界觀の普遍的考察を與へるものとしてヤスペルスは心理學のみならず、更に社會學や論理學の如きものをも數へてゐる。かくてヤスペルスにとつては一方世界觀を設定する豫言者的哲學と他方世界觀を普遍的に考察する世界觀學との間には越ゆべからざる溝渠が横たはるものと考へられてゐるのである。「社

會學は哲學であることに逆らひ、また心理學も同樣に哲學であることに逆ふ。」とはヤスペルスの根本的確信の表明である。＊＊

＊ K. Jaspers, Psychologie der Weltanschauungen. 2. Aufl. 1922. SS. 2—3.

＊＊ Op. Cit. S. 3.

二

右のヤスペルスの所說に依つて世界觀設定の學としての哲學と世界觀の客觀的考察の學としての世界觀學とを區別すべきことを知ると同時に世界觀學を本來の哲學より獨立せる一科學として獨立せしめることを學ぶのである。然し同時にまたこのヤスペルス流の考方に對してわれわれはなほ一つの疑問を——一つの重大な疑問を表明せざるを得ないのである。ヤスペルスの世界觀學が世界觀の心理學であることも亦他の一つの疑問であり、その點に就いてはなほ後で彼の考へと對質せねばならぬのであるが、それよりも一層現在の所で重要と思はれることはヤスペルスの主張する如く世界觀學は世界觀を單に客觀的に(ヤスペルスの言葉では普遍的に)考察することだけに盡きて、世界觀設定といふやうなことと全く無關係であることが出來るかといふ、われわれの疑問を檢討してみることである。

ヤスペルスの世界觀の心理學の思想は元來マックス・ヴェーベルの思想に依據してゐるのである。

マックス・ヴェーベルと云へば人々は卽坐に社會學者としての彼を想ひ浮べるでもあらう。然し元來社會學者として活躍せる彼はその信奉せる世界觀に於いては極めて卓拔なる哲學者であつたのであり、ヤスペルスの思想の如きも彼の世界觀から影響を受けしことは決して尠くはないのである。＊ヴェーベルの哲學思想に於いて最も特異にして且つ最も影響力ありしものは科學を以て凡ゆる世界觀から解放せんとする沒價値性の思想である。卽ちヴェーベルは科學研究の課題をば存在の本質を認識することではなく、不斷の進步の過程に於いて事實と聯關とを探究することにあると見做してゐる。それ故科學はわれわれが何を爲すべきかを敎へることはなく、單に一定の前提された目的の下にその目的の實現に對する手段を敎へるのみであると彼は說く。そして更に進んで彼は科學としての哲學も、それが科學である限り、上述の如き科學の性質を有するものと彼は考へる。元來ヴェーベルの考へに依れば、科學といふものは普遍妥當的な知識を與へるものであるが故に沒價値的でなければならぬが、世界觀の如きものは信念に屬する事柄であつて、人はそれに對して信ずるか信じないかが出來るばかりである。かくして世界觀は豫言者的性格を有する人物のみに依つて與へられるものと考へられるのである。こゝにヴェーベルの獨自の槪念たる豫言者的哲學たる槪念が揭げられる理由が存するのである。前にヤスペルスの思想として述べられたものが要するにかゝるヴェーベルの根本的思想より由來するものであることは今や明白となつたと云ふことが出來る。

＊ヴェーベルが本來社會學者であるにも拘はらず、われわれの一層廣き哲學概念から言ふならば一個の卓越せる哲學者であると言ふことが出來る。彼の思想に依るヤスペルス自身ヴェーベルに對してかゝる評價をなしてゐる。卽ちヤスペルスはその著書、„Max Weber. Deutsches Wesen im politischen Denken, im Forschen und Philosophieren“ 1932. のうちで、政治家並びに研究家として、また人間として事實なしたことのうちにヴェーベルの哲學的思索を求むべきであると、述べてゐる。ヴェーベルの研究をかくの如く評價することはわれわれのこの論述の全體にも關聯することであるが故に、敢へて附記するのである。なほヴェーベルに於ける哲學を取扱へるものとしては次の著述は注目すべきものである。Artur Mettler, Max Weber und die philosophische Problematik in unserer Zeit. 1934.

ヴェーベルのかくの如き根本思想は彼の《Wissenschaft als Beruf》のうちに最もよく要約されて現はれてゐる。＊この論文の中で現在のわれわれの問題に關係ある點を拔き出すならば次の如きものとなるであらう。（一）、實證的專門科學は全て世界觀の設定に對して何等の意義をも有しない。それの研究の態度は沒價値的でありまた世界觀的には無前提であることを本質とする。そしてまた實證的專門科學の歷史的發達といふものは際限がないのであつて、それの研究に携はる者は世界觀的禁欲者の態度で以つて自己に與へられた科學の現狀に對して僅かづゝ自己の寄與を附加してゆくことを以て滿足せねばならぬ。然し彼の成し遂げた仕事は彼よりも後の時代の者に依つて再び克服される運命にある。（二）、それにも拘はらず一定の世界觀を持つといふこと、卽ち「特定の神々に仕へる」といふことは人間にとつては凡ゆる科學よりも遙かに重要なことである。（三）、ところで普通人々が期待するところの哲學といへども、それが形式的な認識論や規範論に限られねばならぬ限

りは、決して世界觀を與へることも設定することも出來ぬ。それ故科學的乃至哲學的に世界觀を設定する代りに世界觀學が出現せねばならぬ。卽ち世界觀學に依つて、諸世界觀の內容を客觀的に記述し、乃至はそれらの世界觀の比較的類型論を展開し、場合に依つては人間の心理學的基本類型に還元したり或ひは經濟組織、政治組織、人種、または民族や人類の發展段階に對する世界觀の關係を理解することに努めるものである。(四)、ところで科學も哲學も世界觀學も世界觀の設定に對して役立たぬが故に、何に依つて世界觀が設定されるのであるかと云へば、傳統、風習、階級的乃至民族的運命でなければカリスマ的豫言者であると言はねばならぬ。(五)、ところでかゝる豫言者は現在存在することはないが故にわれわれには豫言者に對する終末觀的な期待とわれわれの周圍の暗黑に包まれた苦惱に充ちた忍耐とがあるばかりである。

* M. Weber, Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre. SS. 524—555. このヴェーベルの思想の要約はシェーレルの敍述に從つた。

右に述べたヴェーベルの科學論の思想は極めて特色あるものであるとともに、そこに極めて强力な主張が含められてゐる。然かもその主張には彼と對蹠的な主張を抱くわれわれといへども承認せざるを得ぬ幾多の要素を有する。就中ヴェーベルの主張するところの科學は客觀性を有たねばならぬといふ考への如きはわれわれも亦是認せねばならぬ所である。それ故科學の研究が沒價値的な、

世界觀的に無前提な態度に依つてなされねばならぬといふこともわれわれも一應は承認せねばならぬ。然し科學的研究が沒價値的な、世界觀的に無前提な態度に依つてなされるといふことは、絕對的な意味に於いて言へるかどうかは疑問である。如何に實證的な科學研究であつても、その實證的な探究方法のうちに既に何等か一定の價値規準に基いて探究の方向を決定するといふことがないであらうか。また世界觀的に無前提であるといふが、その世界觀的に無前提であるといふこと自體が、既に一定の世界觀を表明してゐると、考へることも許されるのではなからうか。かゝる點に就いてわれわれはなほ深い反省を要求されてゐると考へられるのである。

このやうなヴェーベルの科學論の思想に對して鋭い批判を下してゐる者にマックス・シェーレルがある。シェーレルのこの批判だけに就いてはわれわれはシェーレルに加擔するものであるが、今このシェーレルの批判を少しく詳細に紹介することはわれわれの世界觀學の理念を明かにするのに少からず役立つことと思はれる。* まづ第一にシェーレルは科學の研究が嚴格に、無前提的に行はれれば行はれるほど、それが世界觀の設定に對しては本質的に無意味であること、また世界觀を與へ得ぬことが科學の本質であることに就いては、ヴェーベルと意見を同じくしてゐる。シェーレルに依れば、(一)科學は元來諸科學として存在するのであつて分業上の多樣性といふことが科學の本質である。然るに世界觀といふものは統一を要求するのであつて分業がない。(二)科學はその發達の

途中では如何なる所でも未完成であつて、新しき觀察に依つて訂正することが出來る。之に反して世界觀といふものは先天的な本質知識が與へ得るやうな明白な決定的なことをその確信のなかに取入れねばならぬ。また世界觀は時代に依つて變ることなき自然的世界觀から原理的に取り出し得るものを設定する。(三)そして世界觀が樹立せんとするところのものは、世界觀の永遠なる構造形式を再現する世界の全體性である。(四)科學が沒價値的であるのは、その對象を把捉せんがために凡ゆる價値から、また神とか人間とか集團とか黨派とかの凡ゆる特殊な意志目的から自由に眼をそらさねばならぬからである。(五)科學が取扱ふところのものは人間中心的な世界でもなく、絕對的な現存在領域でもなくして、むしろこの兩者の中間に存する現存在の一階層である。然るに世界觀は絕對的な本質並びに現存在をば觀想的に有することが出來るものであるからして、本質上世界觀は人格的なものであるしまた人格的指導に依存するものである。然るにヴェーベルに依れば人格的といふことは全く主觀的といふことと同樣に考へられてゐるが、凡ゆる事物の絕對的な現存在の段階が理解し得られるやうになるのは人格形式に對してのみである。それ故本質形相學及び形而上學としての哲學は吾々の科學的認識や評價の形式的前提を確立することよりも遙かに中心的な課題を有することを、ヴェーベルは認めない。その結果としてヴェーベルの立場にとつては凡ゆる實質的哲學が單なる世界觀學へ解消してしまふこととなる。かくてヴェーベルは科學及び世界觀學は一切の

世界觀設定とは關係なきものと見做すと同時に他方では世界觀を設定することに係はる豫言者的哲學を承認することとなるのである。

* M. Scheler, Weltanschauungslehre, Soziologie und Weltanschauungssetzung. (Moralia. 1923)

之がシェーレルがヴェーベルに對する對質の議論である。われわれも亦シェーレルとともにヴェーベルに於ける哲學思想に對して不承認の聲を揚げなければならぬ。卽ちヴェーベルの思想に於ける第一の誤謬はシェーレルの言ふ如く凡ゆる實質的哲學をば世界觀學のなかに解消して、哲學を以て豫言者に依る宗敎的啓示と同樣な信念の表白と同一視してゐることである。然しこゝで特に注意しておかねばならぬことは、このヴェーベルの誤謬から逃れる道を世界觀學を哲學へ引揚げることと考へてはならぬといふことである。かかる解決方法が結局世界觀學を以て一個の獨立せる科學であることを否認するものであり、われわれのこれまでの論述がかゝる解決とは反對の方向に向つてゐたことは明白であらう。それ故ヴェーベルの誤謬は、凡ゆる實質的哲學をば彼の謂ふ世界觀學のなかから取り出して哲學に返して世界觀學としては全く科學的研究の內容のものを殘しておくことに依つてのみ、訂正されるのである。勿論またヴェーベルの主張する豫言者的哲學を哲學の中心的領域として殘しておくことも誤りであらう。そこでわれわれは再びヴェーベルに於ける哲學概念のうちから本來宗敎的な要素を宗敎の領域に返さねばならぬであらう。このやうなヴェーベルに於ける哲

學及び世界觀學の概念は致命的な缺陷を有してゐるのであるが、ヴェーベルの學徒たるヤスペルスにもこの缺陷は同じく傳承されてゐると考へねばならぬ。ヤスペルスが折角哲學より區別して世界觀學の領域を開拓せるにも拘はらず、彼の世界觀學のうちには本來哲學であるものが含めて考へられてゐるのである。ヤスペルスはその世界觀の心理學の研究を進めるに當つて屢〻心理學の研究方法が全體的に考察するものであることを言つてゐるが、それなどは明かに彼に於ける哲學と心理學との混同を表示せるものである。

上述の如き考察に基いてわれわれはヴェーベル＝ヤスペルス的の仕方とは違つた仕方で哲學と世界觀學とを區別して、世界觀學を一の科學として樹立すべきことを知つたのである。ヤスペルスの世界觀の心理學の主張に於けると外形上は同じく世界觀學を哲學に對立せしめることをわれわれは主張するとともに、實質上にはその世界觀學及び哲學の概念の內容を異にすべきことをわれわれは主張するのである。かくすることに依つて世界觀學なるものの學問の體系上に於ける位置を一應確定することが出來たと言つて差支へないであらう。然しながらこれだけでは先にわれわれが提出したところの科學としての世界觀學は果して世界觀の設定といふことと何等關係がないと言へるかといふ疑問は未だ解決せられてをらぬのである。この問題に就いてもシェーレルのヴェーベル＝ヤスペルス的考へに對する批判が一の正當な方向を示すものと考へられるが故に、少しくシェーレルの所

說を紹介せねばならぬ。

シェーレルは哲學を以て設定的世界觀（setzende Weltanschauung）を內容とするものと規定して、かかる內容を有する哲學をば世界觀學に解消することに反對し、然かも設定的世界觀が世界觀學に先行することに依つてのみ後者の課題や意義が明かになると說いてゐる。まづシェーレルの說く所に依れば設定的世界觀としての哲學は三種の本質的に異る認識源泉を有すると云ふ。その第一のものは地理的、歷史的條件に依つて異ることなき不變なる自然的世界觀であり、第二は實在性の契機を還元して凡ゆる形式的並びに實質的な現存在の可能性についての先天的知識を展開するところの哲學的形相學であつて、之に第三のものとして諸科學の狀態が加はる。このうち前二者は集積的歸納的經驗の多寡の如何に關係せざるが故に歷史的發達の如何なる段階に於いても到達せられる如きものである。然るに形而上學的認識には第三の源泉として實證科學の諸命題が流入するがために、それは假設的、蓋然的なものとなるのである。そして實證科學が各時代每に進步成長するものであるが故に、一定の世界觀的精神を以てこの進步成長せる實證科學の夫々の狀態を貫き、科學的收穫をば自己のうちに取入れるといふ意味に於いては、哲學的形而上學も時代とともに進步成長するものである。かかる意味に於いてのみ哲學も「時代の表現」であると言ひ得るが、それ以外の意味に於いては哲學は philosophia perennis であると言はれねばならぬ。かくて哲學は philosophia perennis

でありながら多數の類型に於いて現はれ、然かもそのいづれの類型の哲學も唯一の哲學であることを標榜する。かくの如く哲學體系の諸類型が共存するところからしてそのいづれの類型も眞でも誤りでもないとか、人間の種々の心理學的類型の表現に他ならぬなどと考へてはならない。哲學が夫々異つた類型を採つて現はれるにせよ、それは同一の對象に就いての眞理を現はすものである以上、哲學は設定的世界觀であると言ふべきである。以上がシェーレルの考へる哲學の本質であるが、かゝる哲學の與へる世界觀との關聯なしには世界觀學の研究も行はれ得ないと彼は主張するのである。

ところでわれわれはなほシェーレルの謂ふ世界觀學の概念を紹介せねばならぬ。ところで彼は世界觀學なるものはそのうちに次の如き四つの部分を有すると考へてゐる。第一は本質上可能なる諸世界觀一般並びにこれらの世界觀の諸要素の本質的聯關に關する學問であり、第二は實證的な、純粹に意味記述的な世界觀學である。第三のものは理念型的な精神的作用聯關を追體驗し、表現するところの、主觀的に理解を試みる世界觀學であり、第四としては一定の世界觀が現實の世界に於いて何故實現され、普及され、支配したかを究明するところの、因果的說明を志す世界觀の人種學や社會學や心理學である。以上がシェーレルが世界觀學の四つの部分として揭げるものであるが、この分類に就いて注目すべきことはその第一のものはいはば世界觀の本質學とも稱すべきものであつて

哲學の研究と直接關係して攻究さるべきものであり、後のものになればなるほど一層實證科學的となることである。そして事實われわれが世界觀學を一の科學として樹立せんとする場合に當つても、その最も中心的な分野は第四の部門であると言ふべきである。然し兎に角これら四つの部門を通じて世界觀學的研究が行はれるに當つては、設定的世界觀がそれに關聯を有して、それの目的や課題を規定するといふのがシェーレルの意見なのである。

このやうなシェーレルの意見に對してわれわれは大體に於いて贊同の意を表せねばならぬ。なぜならば右に述べた世界觀學の四つの部門のうち第一の部門が他の如何なる部門よりも一定の世界觀の設定に關係してゐることは明かである。然し他の部門といへどもまた世界觀の設定に關聯あることは認めねばならぬ。例へば諸世界觀の意味を記述するとしても、その記述の仕方なりまた如何なる意味を撰擇するかといふ點に一定の世界觀の設定がなければならず、また理念型的に精神的作用聯關を表現するとしても、それを如何なる側面からするかといふ如きことは矢張り一定の世界觀の立場に立つてなされねばならぬからである。それ故シェーレルは設定的世界觀が世界觀學に對して有する重要な關係に就いて次の如く述べてゐる。「形而上學及び實質的價値等級學として如何なる世界觀學にも先行せねばならぬのはつねに設定的世界觀學である。意味記述に依つて探究される凡ゆる諸世界觀をそれらの認識價値の上から評價し、それらの眞理的諸要素を自己のうちに同時に取入

れて益々擴大されし全體のなかに編入しはするが、それらの錯誤や偏狹や誤謬は同時に自己からして然かもそれらの洞察や措定の基礎の上に說明せねばならぬのは、設定的世界觀形而上學（乃至は超心理學、超歷史學）である。」*

* M. Scheler, op. cit. S. 18.

右に述べし如く、シェーレルは世界觀學と世界觀設定との密接な關係を主張してゐるのである。然しながらこの場合シェーレルの主張してゐることはこの兩者が密接な關係にあることだけであつて、この兩者が何等か或る統一的な關係にあることを彼は主張してゐるのではない。たかだか彼の主張の要旨は世界觀設定が世界觀學の研究に先行すべきであり、前者が後者に對して優位を占めるといふことである。世界觀設定が哲學の職分に屬すべきである限り、それは飽く迄科學としての世界觀學の領域には屬さぬと彼は考へる。兩者がその概念の內容上考へられる所はヴェーベルとシェーレルとに於いては異るとはいへども、兩者が對立狀態にあることは同一である。然しながら科學としての世界觀學の研究の實質的內容が如何なるものであるにせよ、その研究が實際には何等かの世界觀の前提の下になされてゐると、考へねばならぬ。事實またシェーレルが世界觀學の研究成果として示してゐるところのものは後に示す如く一定の世界觀――カトリック的世界觀の上に立つてゐると言はざるを得ないのである。勿論シェーレルにあつてはヴェーベルに於ける如く設定的世界觀と世界觀學

との對立が主張されるだけではなくして、前者が後者に對して先行の關係にあることが强調されてゐる。そしてこのことは確かにこの問題に就いてシェーレルがヴェーベルよりも優れてゐることを示すものであつて、彼の功績の一つであると言へる。然し何と云つてもシェーレルはなほこの問題に就いては中途半端の考方しかしてをらぬのである。それであればこそ彼は世界觀學を世界觀の社會學乃至は知識社會學として展開してをりながら、科學からイデオロギー性を拒否する次の如き言葉を表明してゐるのである。「ブルジョワとかプロレタリアのイデオロギーといふものは存在する。然しそのやうなイデオロギーとは少しも關係せぬところの諸科學が存在するだけである。」*

* M. Scheler, op. cit. S. 9.

われわれはシェーレルの立場よりさらに一歩進んで世界觀學そのものが既に世界觀の設定と結び付いてゐることを承認する如き立場を採らねばならぬ。世界觀學を哲學ならぬ一個の科學として樹立することはわれわれのこれ迄の論述に於いて主張して來たところであるが、かゝる科學としての世界觀學が既に世界觀の設定なくしては研究され得ぬことを今や新たに主張せんとするのである。諸々の科學がその科學の立場に於いてはもはや追求し得ぬ如き一定の諸前提の下に於いてのみ研究が遂行されると普通言はれるやうに、そのやうな一定の諸前提と云はれるものはわれわれの考へる所では世界觀的のものである。そしてさらにそれらの諸前提の下に夫々の科學の實證的研究が行は

れるのであるが、その場合その實證的乃至は經驗的とか云はれる作業は矢張りそれらの諸前提の全體が有する一定の性格の方向に向つて行はれるのであつて、そこにもわれわれは世界觀的なものを認めなければならぬのである。最後に諸々の實證科學が夫々その研究の成果として示すところの夫々の世界像は綜合されて一定の世界觀を表明することとなるのであるが、それらの科學の示す世界像のなかにも既に世界觀的なるものが表示されてゐると云つて差支へないのである。このやうな意味に於いて實證的科學と云へども決して世界觀と無關係ではあり得ない。また實證的科學者が自己の研究を以て全く實證的であるの故を以て世界觀といふやうなものとは何等關係がないと敢へて主張する如き場合であつても、それは畢竟實證主義といふ一の世界觀の上に立つてゐると言はざるを得ないのである。

このやうな主張に對して容易に起り得ると想像される反對意見は、このやうな立場に於いては哲學と科學との差別がなくなり從つて科學の科學としての特質も喪失する危險があるといふ意見であらう。然しわれわれは決して哲學と科學との同一性を主張するのでもなく、また況んや科學を信念の支配權の下に隷屬せしむべきことを主張するのでもない。われわれの意圖する所は哲學と科學とが全く差別あるものでありながら、そこになほ兩者の間に統一のあることを主張することにある。云はば哲學と科學とは差別に於ける統一なる辨證法的關係にあるものなることをわれわれは主張し

たいのである。哲學と科學との間のかゝる關係、從つて世界觀設定と世界觀學との間に成立する同樣なる關係を明かにすることは實にまた世界觀學の主要なる課題の一つでもあるのである。

それ故この問題に立入つて論ずることはこゝでは差控へておかねばならぬが、たゞ世界觀の社會學の概念を明かにするのに關係ある限りに於いてなほ二三の注意を附加へることにする。われわれは先きに世界觀學が世界觀設定と關係のあることを述べたが、然しそれは決して世界觀學が世界觀設定を本來の目的として哲學の課題をも自己の手中に收めんことを敢てするといふやうな意味ではないのである。世界觀の設定を直接目的とすることが哲學の課題であることはわれわれと云へども否認するのではない。たゞ世界觀學の研究が一の科學的研究でありながら一定の世界觀の設定を前提としてのみその實際の研究が遂行されてゐることを言はんとしてゐるのである。その意味に於いては世界觀學はシェーレルの言ふ如く世界觀設定を先行せしめるだけではなく、その實際の研究の過程のうちに一定の世界觀が設定されるのであり、そしてまたヴェーベルの言ふ如く沒價値性を特色とするものでもない。然しだからと云つて科學としての世界觀學は世界觀設定の哲學の如く世界觀そのものを設定することを直接の目的とするものでもない。却つて科學としての世界觀學は一應世界觀の設定といふやうなことからは離れて實證的な研究を進めてゆかねばならぬ。然し科學としてのかかる實證的な研究のうちに一定の世界觀が設定されてゆくのである。

かくの如く世界觀學はその前提に於いても、その研究方法に於いても、またその研究の成果に於いても必ず一定の世界觀の設定と結び付いてゐる。ただそれが實際上研究されてゆく場合に、研究者は一應世界觀の設定とは全く關係なき如き態度を以て研究を進めてゆかねばならぬ。そして世界觀學なり乃至は一般に科學なりに於いてその研究と實際上結付いてゐた一定の世界觀がまさに世界觀そのものとして設定されるのは哲學の領域に屬することである。また他方哲學の立場に立つて考へてみても、世界觀が直接端的に設定されるわけではない。哲學に於いて世界觀が設定されると云つても、そのことがなされるためには、世界觀が直接の現實的存在に於いては如何なる形態のものであるかを闡明する世界觀學を媒介とせねばならぬのである。われわれが世界觀學としての「世界觀の社會學」を研究せんとするのも實に世界觀設定の哲學に對して媒介となるべき地盤を提供せんとするがために他ならない。それ故われわれの世界觀學はヴェーベル乃至はヤスペルスのそれとは異つて世界觀設定のために研究されるのである。かくしてこの論稿の究極の課題は世界觀の社會學の論理的諸問題を究明することに依つてこの研究そのものを指導してゐるところの一定の世界觀を取出して示すことにある。（未完）